

川上宏奨学金報告書

論文題目

張愛玲文学にみる「衣」の自由

論文要旨

1943年、日中戦争下の上海で、張愛玲という女性作家が頭角を現す。彼女の独特な感性が現れている文学作品は、多くの人々を魅了した。張愛玲に対する人々の関心は、彼女の洗練された文章に対してだけではない。任・王（2004）は彼女の衣服へのこだわりを「恋衣癖」と表現し、他人の目からは理解できないため「奇装異服」と呼ばれたことを紹介している。先行研究の多くでは、彼女の衣服観を家庭環境に起因していたと評されている。しかし、張愛玲がこだわった衣服には、それ以外にも、社会に発信したい彼女の思想が存在していたはずである。「衣」の描写にこだわった張愛玲の真意はどのようなものだったのか。また、その思想が、彼女の文学作品にどのように現れているのだろうか。これらの問いを明らかにするため、衣服にまつわる張愛玲のエッセイ「更衣記」と長編小説『半生縁』、短編小説「封鎖」の分析を行った。

第1章では、張愛玲が衣の描写に徹したエッセイ「更衣記」を用いて、衣服に見える張愛玲の思想を読み解いた。「更衣記」では、清朝以前の旧来の文化を批判し、一方的に西洋文化を受容する中国民国時期をも否定している張愛玲の姿を捉えることができた。既存の文化の枠組みに捉えられている社会に、張愛玲は警鐘を鳴らしていた。自由を追求する張愛玲の思想が、「更衣記」に現れていた。

第2章では、1969年に皇冠出版社で発行された張愛玲の長編小説『半生縁』（もともと「十八春」として新聞『亦報』に連載）と、1943年に雑誌『天地』で発表された「封鎖」を用いて、張愛玲の思想を読み解いた。文中に出現する登場人物の衣服描写のテキストを分析し、「更衣記」で記されている張愛玲の思想と照らし合わせた。第1節では『半生縁』を扱い、7つの女性衣服表現を取り上げる。第2節の「封鎖」では、2つの男性衣服表現を取り上げる。計9つの服装表現をもとに内容分析を行った。張愛玲の文学作品の衣服表現には、自由が欠如している社会と、それに囚われている当時の人々の姿が反映されていた。

張愛玲の衣服へのこだわりを、単に「恋衣癖」や「奇装異服」という言葉だけで片付けてはならない。張愛玲の文学作品の衣服表現には、既存の文化の枠組みにとらわれている

人々や社会への批判と、自由への渴望が隠れていた。張愛玲の文学作品や、彼女の生き方を記した伝記は今でも中国で愛読され、人々の共感を呼んでいる。新旧文化が混沌とする中華民国時代の上海と同じように、共産主義と資本主義が混ざり合う現在の中国だからこそ、張愛玲が主張する自由の思想が人々の心により響いているのである。

奨学金の主な用途

- ・書籍代
- ・書籍の送料（海外からの EMS 輸送）
- ・国会図書館でのコピー代
- ・国会図書館への往復交通費（8回）

謝辞

本研究を実施するにあたり、奨学金を寄付してくださった故川上宏先生とご家族、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。今年度はコロナの関係もあり、現地での研究を断念せざるを得ませんでした。川上奨学金により、多くの書籍を入手し、無事、本研究を完成させることができました。本当にありがとうございました。